

小泉セツから伊藤比呂美へ

——「ナシテ、モーネン」と説経節——

跡 上 史 郎

小泉セツから伊藤比呂美へ

——「ナシテ、モーネン」と説経節——

跡上 史郎

序論 なぜ「ナシテ、モーネン」が問題か？

「とげ抜き 新果鴨地蔵縁起」(二〇〇七・六、鐘談社、以下「とげ抜き」)は、説経節と現代詩を融合した伊藤比呂美独自の語りもの世界の到達点と言ってよいだろう。「とげ抜き」は、二〇〇七年第十五回萩原朔太郎賞を、続く二〇〇八年には第十八回紫式部文学賞を受賞したことから見ても、伊藤の新たな代表作の一つであることは間違いない。

伊藤は、一九七八年のデビュー以来、八〇年代(女性)詩ブームの牽引者の一人となり、(女性)による詩のイメージを革新した。しかし、そこから「とげ抜き」までの歩みが一直線だったわけではない。伊藤は、「良いおっぱい悪いおっぱい」(一九八五・一一、冬樹社)で、「子育てエッセイ」という新ジャンルを開拓する一方、「家族アート」(一九九二・七、岩波書店)で一九九三年第六回三島由紀夫賞候補、「ハウス・プラント」(新潮)一九九八・五)で一九九八年第一一九回芥川龍之介賞候補、「ラニーニャ」(新潮)一九九九・

三)で一九九九年第一二一回芥川龍之介賞候補、「ラニーニャ」(一九九九・九、新潮社)で一九九九年第二十一回野間文芸新人賞受賞と、小説家として活躍する時期があり、その間はほとんど詩を書くことをやめてしまっているのだ。

伊藤が明確にまた詩に復帰したのは、「河原荒草」(二〇〇五・一〇、思潮社、二〇〇六年第三十六回高見順賞受賞)であり、ここには「とげ抜き」と同じく説経節との、続く「コヨーテ・ソング」(二〇〇七・五、スイッチパブリッシング)にはネイティブ・アメリカンの口承詩との強い関連性が見て取れる。つまり、伊藤の現代詩への距離の取り方と、近代的な個を離れた集団的な口承文芸への接近が連繫していると考えてよいだろう。

この流れを見ていくと、時から小説への移行期の一九九〇年代前半が一つの注目ポイントとして浮かび上がってくる。例えば、「家族アート」中の「オグリ」は、ラフカディオ・ハーンが「探話」した説経節「小栗判官」をさらに伊藤が語り直したものである。一方、同時期の「わたしはあんじゅひめ子である 伊藤比呂美詩集」(一九

九三・八、思潮社)はカバー見返しに「詩集 朗読用テキストとしても」という但し書きが刻印された詩集であるが、ここに収録されている「わたしはあんじゅひめ子である」は、もちろん説経節「山椒木夫」を踏まえたものであり、口承としての説経節と詩の朗読の接続が企図されていたことが窺われる。

小説にもエッセイにも見える「家族アート」¹⁾、明確に詩集である「わたしはあんじゅひめ子である」が併存する九〇年代初めを経て、伊藤はしばらく時を離れることになるのであるが、いずれにしても説経節が重要な鍵になっていることは間違いない。また、時から離れることになったとはいえ、伊藤が「わたしはあんじゅひめ子である」を捨てて顧みなくなるといふことは一切ない。

一九九九年に、伊藤比呂美とともに辻征夫、水瀬清子、谷川俊太郎、石垣りん、まごみちおら六人の日本の詩人の朗読を集めたCDブック *Masters of Modern Japanese Poetry* (『日本現代詩の六人』)が企画発売されるが、伊藤のセクションに収録されているのが「わたしはあんじゅひめ子である」(I Am Anjūhimeko, Three Years Old)であり、また、Poetry International Webで広く世界に向けて発信されている Hitomi Ito のページで公開されている伊藤の朗読の音声ファイルもまたこの「わたしはあんじゅひめ子である」(I am Anjūhimeko)なのである。

伊藤の詩的営為において、説経節の果たした役割は非常に大きい。Jeffrey Angles は「わたしはあんじゅひめ子である」を "one of Ito's masterpieces" と位置づけ、伊藤のこれまでの詩的営為、および説経節との史的関係に目配りしつつ、極めて広角の視野から、その "shamanistic" style の解明を試みている。そもそも伊藤比呂

美の "shamaness" としての自覚は、上野千鶴子との共著『のろとさになわ』(一九九一・一二、平凡社)というタイトルにも表れていると見えるだろう。²⁾

一方、Angles も先に触れた『家族アート』中の「オグリ」に言及し、ラフカディオ・ハーンとの関係を指摘しているのであるが、さらにこの線を掘り下げていくという道筋があるのでないだろうか。本稿で注目したいのは、「わたしはあんじゅひめ子である」に収録されている「ナシテ、モーネン」である。「ナシテ、モーネン」とは、ラフカディオ・ハーンこと小泉八雲の妻であった小泉セツ(節子)が熊本時代に作成した英単語帳に記載された言葉なのであるが、伊藤と説経節の接点において、実は、この小泉セツ、あるいはセツとラフカディオ・ハーンとの関係、さらには熊本という土地が、ある大きな役割を果たしていたのだとしたらどうだろうか。

以下、①まずセツとハーンとの関係をもとにしていると思われる詩の内容を確認するが、②われわれはそこに「アクセントのない」「言語」という不可解な表現を見出すことになるであろう。③そこで次に、いかにして伊藤がセツとハーンとの触れ合いの記録である英単語帳に接したのかという媒介者の特定を行っていく。④さらに、明確かつ具体的な資料の特定をもってしても未だに残るその先の謎の領域へと踏み込むため、間接的な資料が参照される。そのことにより「アクセントのない」「言語」の内実は明らかとなり、はじめて「ナシテ、モーネン」はその全貌を現すに至るであろう。⑤そして、最終的にわれわれは、近代文学の流れに悼す現代詩の枠組みを超えようとする伊藤比呂美の異数の試みが、表現の歴史的・空間的広がりにおいては決してマイナーな、孤独なものではなかったことを理

解するための扉の入り口に辿り着くに遠くない。

つまりこの問題は、単に伊藤比呂美という詩人の個性にとどまらない、長い射程を持つているように思われる。後に「どげ抜き」で問題となる詩のように見えない詩とは、実は現代詩の、ひいては現代文学の最先端なのかもしれない。現代詩に対して、あらゆる方向から突破口を切り開こうとした(女性)時の旗手、あるいは反(女性)時の旗手の軌跡を、改めて問い直してみたい。

①「ナシテ、モーネン」はどんな詩か?

伊藤比呂美「わたしはあんじゅひめ子である 伊藤比呂美詩集」(一九九三・八、思潮社)より「ナシテ、モーネン」を引用する。

ナシテ、モーネン

違和感は皮膚よりも性よりも、

言語をもって明瞭にされる、わたしをも特殊化して、

その言語にはアクセントがなかった、

アクセントのない話し手に囲まれて、わたしは、

流暢に会話をすることができなかった、

その上わたしは無筆だったもので、

書く言語をも嫌悪した、

アクセントのない呼びかけに答えるのはおそろしかった、

呼びかけられている感じを感じることができなかった、

答えてしまったらわたしの言語は、

みにくい、ゆがんでいると聞き取られる、

それを打ち消せない、

彼がよそで覚えてくる言語の中に、

アクセントのあいまいな部分を聞き取るとき、わたしは、

それを洗い流したい欲望を感じた、

声に出す言語はすべてわたしのもの、

知識や、

情動が、

時間や食物が、

よその人の影響下に、あるいは、

よその人びとの管理下にあるものであっても、

彼の書く言語がよその人々にだけ受けとられるものであっても、

耳から入って口から出て、

そのまま消えてゆく言語はわたしのもの、

唾でぬらしても主張したいわたしのもの、

夜半、彼の背中を「し」し洗いながら、

そばかすの浮いた皮膚の上から、

あらゆるアクセントのない言語が洗い流されていくことを念じ

た、

デー、スイーテシタ、レットル、オメン (the sweetest little

woman) 、

といつか彼はわたしに教えた、

デー、スイーテシタ、メーン (the sweetest man) 、

とわたしもそれを真似した、

口うつしの言語たち。

息、息、

異質の、かえるに似た、こおろぎに似た、
彼はやすやすとそれを発音する、

いちばん最初は、

ナシテ、モーネン (nasty morning) だった、

それからアエ、ハブ、エテン、フレンチ (I have eaten plenty)、

それからアエ、アン、ナタ、ハングレ (I am not hungry)、

それからユウ、アーラ、ナタ、ハングレ (you are not hungry)、

あの日わたしははじめて彼の言語に触れえた、

触れてみたら、

言語に対して嫉妬を感じた、

この言語をもって、彼は外界とつながっているのである、

彼は書き、人びとが読む、それは残る、

しかし今、彼はわたしに、その残る言語でもって話しかけ、

言語はわたしの言語とまったく同じように、声に出て消えてし

まう、

消えてゆく言語はスウィートだ、

関係がそこで消えても、

彼の記憶がそこで消えても、

声に出し消えてゆく言語はともスウィートだ、

もつとべんきょうしてせめてあの男の子たちのように、

彼の言語を理解できるようになりたかった、

後悔はわたしを嘆かせる、

それでもわたしが声を出して聞かせる言語は彼をまぢがいにか

せ、

彼はそれについてずっと考えているというのだ、

彼の背中のそばかすたちが、

わたしの言語におどらされて、うごく、うごく、

彼の太い腕にとつてわたしは、

どんなにか軽いだらう、小鬼か妖精のように、

わたしの言語は彼の声を透過して自由になり、

彼の体温や彼の体臭に変化して、

わたしにからみついて消える、

彼は言語でもって、

わたしの存在をほじくりかえし、

小鬼や妖精の棲みついてるためにもとても重たいわたしの、

皮膚を唇を、

見つけ出す、

見つめる、

* 熊本滞り時代につくられた小泉セツの英語覚え書帳から引
用・参照箇所あり。

「ナシテ、モーネン」の初出は「現代詩手帖」一九九一年七月号、
初出時のタイトルは「言語」であり、最後の但し書きの末尾「引用・
参照箇所あり。」は「引用・参照箇所があります。」であった。他に
変更はない。

「ナシテ、モーネン」は二〇〇〇年代後半の伊藤の朗読の定番の一
つとなった感があり、二〇一〇年一月二〇日に行われた「第八回
「二ホン語を壊すひとつの手段」としては、「どげ抜き」で用いられ
ている「声をお借りする」も挙げる事ができるだろう。「ずっと
詩人やってますと書くのがうまくなり、言葉はすべるし自分の時を
どこか模倣するしで、つままない」から窺われるように、「二ホン
語を壊す」の内実は、(い)がにも伊藤比呂美の時である過去の名作
から脱却したいという志向であり、説経節への接近もそれに連動し
ていると考えられるのではないだろうか。

また、引用の後半を素直に信じるならば、「言語をもって明瞭にさ
れる「違和感」とは、英語をめぐる違和感であるということになる
であろう。それは、伊藤と小泉セツに共通する「体験」だったので
あり、この段階では、ハーンに相当するのは「今のパートナー」「ハ
ロルド・コーエン」であるように見える。

② アクセントのない言語とは何か？

一方、違和感に続く「その言語にはアクセントがなかった」とは、
いったいいかなる事態なのだろうか。これは、さらに「アクセント
のない話し手に聞かれて、「アクセントのない呼びかけに答えるの
はおそろしかった」、「アクセントのあいまいな部分を聞き取ると
き」のように、しばらく続くのであるが、英語にアクセントがない、
あるいはあいまいである、というのは、少なくとも日本語に比較し
てみたときには常識的な感覚から外れてはいないだろうか。伊藤は、
アメリカにおいて、本当にそのようなことを感じていたのだろうか。
この問題は、直ちには解決はつかないが、しかし、順を追って確
かめていくならば、決して難しい問題ではない。まず、この詩で一

フェリス女学院大学日本文学国際会議 近現代詩の可能性 モダ
ニズムの視点・女性の視線」中の「詩人伊藤比呂美による朗読と評
演」においても、「どげ抜き」「新訳 般若心経」といった句のテク
ストとともに「ナシテ、モーネン」が取り上げられ朗読されている。
適宜改行された時の体裁ではあるが、最後まで句点が一切なく、
呪文のように続く語りものとしての性格を色濃く持っていると言え
るだろう。Kyoko Onon は、特に英語がカナに変換され表記され
ている箇所注目し、ここに伊藤がハーンとセツとの間の、
almost erotic oral transmission⁶⁾を想像しているという見解を示し
ている。

一方、伊藤自身は、インタビュに答えて次のように言っている。

T 今回「ナシテ、モーネン」は英語での朗読でした。

伊藤「今の二ホン語を壊すひとつの手段として英語で朗読して
いる気がします。これは最初二ホン語で書きましたが、ずっと
詩人やってますと書くのがうまくなり、言葉はすべるし自分の
時をどこか模倣するしで、つままない、時やめるしかないな
と思ひ、それで一旦自分で英作文して、それを直訳の二ホン語
にしました。自分で英訳したので、読んで感じガクガクして
ます。

T この時はラフカディオ・ハーンの妻小泉セツの英語体験が
題材です。

伊藤「小泉セツの体験はまさにわたしそのものだと思ったんで
すね、現実はともかく、言語的に。今のパートナーは、ハロル
ド・コーエンといて、イギリス生まれのアーティストです。
これからアメリカで3人の娘たちと家族やっています。」

番はじめに確定可能なのは、後半「デー、スイーテシタ、レットル、オメン (the sweetest little woman)」そして時のタイトルにもなっている「ナシテ、モーネン (nasty morning)」であろう。「ナシテ、モーネン」が「いちばん最初」に位置しており、「それからアエ、ハブ、エテン、ブレンテ (I have eaten plenty)」[それからアエ、アン、ナタ、ハングレ (I am not hungry)]と続く、あるいはそれに近いものが見つかればよいのである。

⑨ 伊藤比呂美と小泉セツの英語覚え書帳を繋ぐものは何か？

「小泉セツの英語覚え書帳」とは何か。それは、現在は、松江市立図書館蔵となっている「セツの英単語帳」のことである。「八雲の」28回以上にあたる英語のレッスンをセツが熱心に綴ったノート。意思疎通への努力や二人の心のふれあいを感ぜさせます¹⁵。松江市立図書館 Web ページの「八雲資料室」で公開されている「八雲資料室所蔵データ検索」の「直筆原稿・書簡等一覧」によれば、以下のようになっている。

小泉八雲直筆原稿・書簡等

※ 貴重資料であり、保存のため閲覧はできません。

(中略)

37 小泉セツ英単語覚書帳 (ハーン関連草稿他) 1冊 (85P)

38 小泉セツ英単語覚書帳 (ハーン関連草稿他) レプリカ 1冊

しかし、それだとまだ少々疑問の残るところがないではない。耳からの情報だけをもとに「ナシテ、モーネン」に出現する会話文すべてを「小泉セツの英語覚え書帳」の通りに引用して行くことができるであろうか。西のハーン研究と「ナシテ、モーネン」の関係については、Kyoko Onari も指摘しており、西成彦「ラフカディオ・ハーンの耳」(一九九三・二、岩波書店) を挙げている。しかし、同書よりもさらに「ナシテ、モーネン」と深い関係にあるのは、「小泉セツが残したハーンとの結婚生活を偲ばせる遺品の中に、英語練習用の帳面がある」という一文で始まる西成彦「語る女の系譜」ではないだろうか。これは、一九九一年一月発行の『比較文学研究』六〇号に掲載されており、時期的にも辻褄が合う。伊藤は、耳からだけの情報ではなく、西の「語る女の系譜」あるいはその草稿を読んだのかもしれない。しかし、同論文に伊藤が引用した英文が詳しく紹介されているわけではなく、これだけでは「引用・参照」は不可能である。とすると、西の取材の成果の一部を見ながら「ナシテ、モーネン」を書いたのではないだろうか。

この点を再度伊藤に訪ねたとし、判明したのは、長谷川洋二「小泉八雲の妻」(一九八八・九、松江今井書店)の巻末「付録」という資料の存在であった。「小泉セツの英語覚え書帳」に関する西の情報源の一つが、西が研究費で購入した同書であり、それは当時西が務めていた熊本大学文学部に残されているはずだといふ。そこで、稿者は、熊本大学文学部の比較文学図書室に赴き、まさに西が研究に使用していた当該書を確認することができた。

「小泉八雲の妻」の巻末には、「付録——セツの『英語覚え書帳』」があり、翻刻された「セツの『英語覚え書帳』」が掲載されている。

(85p)

伊藤はどのようにして、これを「引用・参照」したのであろうか。一九九〇年代初頭以前は、貴重資料のため閲覧できないという措置はなされていなかったのだろうか。あるいは、詩人に対する特別な計らいがあったのだろうか。あるいは、レプリカであれば閲覧可能なのだろうか。あるいは、当時の管理者は現在とは異なっていたのだろうか。

現在はアメリカ合衆国在住の伊藤ではあるが、彼女は熊本文学隊という団体の「隊長」を務めており、以前住んでいた熊本を頻りに訪れるので、熊本文学隊に参加している稿者は、上記の点について本人に直接問い質すことができた。つまり、どのような経緯で「小泉セツの英語覚え書帳」から引用・参照」することが可能となったのかということである。

まず伊藤の最初の答えは、当時同居していた西成彦に聞いたのであり、実際に松江まで「小泉セツの英語覚え書帳」を見に行ったわけではないというものであった。伊藤によれば、当時伊藤は時の執筆中に西に対して当該の詩のことを語り、意見を求めながら詩を書いていたが、西は西で執筆中のラフカディオ・ハーン論のアイデアを伊藤に語り、やはりその反応をフィードバックしながら、アイデアを具体化していったのだという。もし、その通りだとするならば、伊藤は耳からの情報でラフカディオ・ハーンと小泉セツに触れ、想像力をふくらませて「ナシテ、モーネン」を書いていくことになる。それは、セツが語るころの物語に刺激を受けて、自らの「怪談」を紡いでいったラフカディオ・ハーンの営みを、伊藤がはからずも繰り返していたということの意味であろう。

そして、掲載されている表現の「いちばん最初は、」まさに「ナシテ、モーネン (nasty morning)」だった。「それからアエ、ハブ、エテン、ブレンテ (I have eaten plenty)」と続くが、次が伊藤の「ナシテ、モーネン」の順接と異なり、「デー、スイーテシタ、レットル、オメン (the sweetest little woman)」[デー、スイーテシタ、モーネン (the sweetest man)]に相当する表現が来て、「それからアエ、アン、ナタ、ハングレ (I am not hungry)」と続いているのである。

さらに補足すると、この付録では、「ハーンが言ったと思われる英語」[セツが書き取り書をしたもの]「セツが記した『意味』」が一覧で掲載されており、例えば「ナシテ、モーネン」の場合、「Nasty morning ナシテ・モーネン わるえ(の)あさ」のように記載されている。伊藤が「」を「」にするなど多少の改変を加えていることがわかる(すべてを説点で統一するリズム上の配慮であろう)。特に、「デー、スイーテシタ、レットル、オメン (the sweetest little woman)」[デー、スイーテシタ、モーネン (the sweetest man)]の元の形は、「You are the sweetest little woman in the whole world ユオ・アアラ・デー・スエーテシタ・レットル・オメン (マー・エン・デー・ホーラ・ワラーダ (あなたは全世界で一番スウィートなかわいい女です。 編者訳))」であるが、編者(長谷川)は、

セツは、その前後の言葉には日本語の意味を添えているのに、この言葉だけは、その意味を記していない。しかし、ハーンは紛れもなく「あなたは世界で一番スウィートなかわいい女です」と言ったのである。セツはその意味を問った。それは、「オ

メン」の脇に小さく「マーン」と書き添えているので知られると推測している。伊藤は、「デー、スイーテシタ、レトル、オメン (the sweetest little woman) / といひか彼はわたしに教えたい、デー、スイーテシタ、マーン (the sweetest man) / といひかわたしを真似した」と変換したのである。

以上、西から伊藤へと手渡された「小泉八雲の妻」巻末付録のコピー等を元に、「ナシテ、モーネン」における「小泉セツの英語覚え書帳から引用・参照」はなされたのだと考えてよいであろう。

④伊藤は西からどのような内容の話を聞いたと考えられるか？

一方で、「小泉セツの英語覚え書帳」の引用箇所が続く「あの日わたしははじめて彼の言語に触れた、／触れてみたら、／言語に対して嫉妬を感じた、／この言語をもって、彼は外界とつながっているのである、」については、「小泉八雲の妻」巻末付録の情報だけではよくわからない。伊藤の情報源は、本人の証言に従うならば、西が執筆中に伊藤に語っていた「語る女の系譜」のアイデアであると考えられるが、その録音等が残されているわけではない以上、手掛かりは、「語る女の系譜」本編以外にはない。以下、「語る女の系譜」の内容を確認してみよう。

まず、冒頭で「英語練習用の帳面」の紹介が続いて、「セツの英語に対する学習意欲」と、あまりそのことに積極的ではなかったらしいハーンの態度、しかし「一種、傲慢に見えたりもする彼のセツ操縦法にいかなる独創を読み取ることができるとに照準を当てたい」という問題設定が示される。

セツに共有されるものではなかった。

このような事態を踏まえることで、セツに寄り添う「ナシテ、モーネン」中の「言語に対して嫉妬を感じた、」の内容が明らかになってくるだろう。「あの日わたしははじめて彼の言語に触れた、」は、あまり積極的ではなかったハーンに英語の教授を受け、その言語にやっとセツが「触れえた」ということになり、そこからハーンとその友人の男たちを排他的につなぐ英語への「嫉妬」が生じるのである。

とすると、ここでの「言語」は一貫して英語であると考えるとよいのであろうか。後半の「嫉妬」はそれで意味が通るように見える。しかし、それだけでは前半の「違和感」が視野に入ってきたとき、一貫性のある解釈を形作るができない。

前半の「違和感」は「アクセント」のない「言語」にまつわるものであったが、伊藤がここでセツの英語体験に重ね合わせようとしているのは、先に確認したハロルド・コーエンとの関係における英語体験ではないとしたりだろうか。では、別の人物にまつわる英語体験なのかというと、それも違う。そもそも、ここにおける「アクセント」のない「言語」とは、端的に英語ではないと考えることはできないだろうか。

伊藤が体験した「アクセントのない話し手」に囲まれ」ということ、「流暢に会話を持つことができなかった、」こととは何か。この段階では判断としないが、最大のヒントは、「彼がよそで覚えてくる言語の中に、／アクセントのあいまいな部分を聞き取るとき、」にあるであろう。もしその言語が英語であるならば、「彼」にハーンを当てはめてみても、コーエンを当てはめてみても、かなりおかしなこ

次に検討されるのは、ギリシアに生まれて英国に渡った、あるいはマルティニーク島でクレオール文化に親しんだハーンが体験した「母語の抑圧」(英語に抑圧されるギリシア語、フランス語に抑圧されるクレオール語)である。それに照らし合わせてみれば、「近代の日本」が「古きよき伝統を失おうとしていることに対して危惧を覚え、警鐘を鳴らす必要を感じた」ということは「きわめて良心的な行為だった」のであり、この文脈からすれば、セツの英語学習に積極的ではなかったハーンを一概に責めることはできないということになるであろう。

さらに西は、「ハーンが英語を教えた相手は、ことごとく男子だった」ことを指摘する。「明治日本の男子エリート主義教育のお先棒を担ぐ身となったハーンに向かって「母語」を用いながら、気さくに話しかけてくれるほんとうの日本人の役割は、身近なところにいる誰か女性が引き受けていくしなくなっていた。フォークロアの収集を志すものにとっては命綱にも等しいインフォーマント(現地語による情報提供者)たちである。」「ハーンがセツに求めていたのは、あくまでも「女中兼料理番」的存在、それに暗闇の中で妖艶な物語を心ゆくまで堪能させてくれる「乳母」の要素まで兼ねそなえた存在」だったのであり、「女子大学でも卒業した学問のある女だった」を口癖にしたセツの胸中であつたのは、同時代の先端を行くような女学生族に対する羨望というよりは、ハーンの求めるがままに日本の歌謡を英語に訳したり、セツにはまるでちんぷんかんぷんの横文字で長文の手紙をよこしてきたりする男たちに対する嫉みであつたと考えるべきなのだ」ということになる。ハーンにはハーンの文脈があり、斟酌可能ではあるが、しかし必ずしもそれは

とはなっていない。

実際には、「その言語」はアクセントがなかった、のではない。東京北都方言の話し手である伊藤とは異なるアクセントを有しているため、伊藤は「アクセントがないように感じられる日本語である。その言語を「彼」がよそで覚えてきて、伊藤の前で使うことによつて、「アクセントのない呼びかけに答えるのはおそろしかった、／呼びかけられている感じを感じることができなかった、」という事態を生ずることになったのである。すなわち、この「言語」とは熊本弁だ。「彼」は西成彦である。西とともに一九八四年熊本にやってきた伊藤は、そこで聞きなれないアクセントを持つ、あるいは伊藤にはアクセントがないように聞こえる熊本弁の話し手に囲まれたり、「彼」が西が家庭外で熊本弁を覚えてきて、それを家庭の中に持ち込んだりすることになった。あるいは、後には生まれた子どもたちが熊本弁を話すようになり、一九九〇年代になると、家庭の中においてさえ伊藤はまさに「アクセントのない話し手に囲まれ」る状況に立ち至ったかもしれない。

熊本弁から疎外されるという伊藤の「違和感」としての言語体験は、後半で英語から疎外されるセツの「嫉妬」という言語体験へと巧妙に捻り合わせられ、重ねあわせられ、擦れ合われ、抽象化される。そのように考えれば、一連の流れが了解可能なものとして、われわれの前に立ち現れてくるのではないだろうか。

後半の「嫉妬」についてはもう少し検討が必要であろう。「この言語をもって、彼は外界とつながっているのである、／彼は書き、人びとが読む、それは残る、」は、西が指摘したハーンとセツの関係における「男たちに対する嫉妬」と重なりつつ、しかし微妙にずれて

もいるようだ。西が説明していたセツの「嫉み」は、ハーンと自分以上に濃密に英語でコミュニケーションできる男たちへのものであり、それはもう少し後に出てくる「もつとべんきょうしてせめてあの男の子たちのように、彼の言語を理解できるようになりたかった、後悔はわたしを嘆かせる」に対応するものと見えるだろう。しかし、ここでの「わたし」は男たちよりも「言語に対して嫉妬を感じた」のであり、その言語によって「彼は書き、人びとが読む、それは残る」という営みがなされる。「しかし今、彼はわたしに、その残る言語でもって話しかけ」という瞬間においては、発話された言語は、それがたとえ英語であったとしても、ハーンの書いた英語のような「残る言語」ではなく、セツの発する日本語のように「消えていく言語」となる。ここにおいて、「残る言語」への「嫉み」は「消えてゆく言語」の「スウィート」と巧妙に対比され、すり替えられることになるのだ。「消えてゆく言語」は勝利し、「わたし」が声に出して聞かせる言語は彼をきちがいにさせ、彼はそれについてずつと考えているというのだ、という事態を出来させる。嫉妬／スウィート、残る言語／消える言語の関係は、くるくると目まぐるしく入れ替わるのである。

⑤「ナシテ、モーネン」はどのような系譜に連なるか？

西は「語る女の系譜」において、「本を見るいけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考えでなければいけません」(思い出の記「恒文社版『小泉八雲』)というあまりにも有名なハーンの影響に言及している。これが、「ナシテ、モーネン」の「わたし」が声

を想起してみてもよい。

稗田阿礼と太安万侶の場合から辿り直してみよう。声による情報提供者は、稗田阿礼(女)であり、文字による記録を行うのは、太安万侶(男)であった。セツとハーンの場合、声による情報提供者はセツ(女)、文字による記録を行うのはハーン(男)であった。西成彦と伊藤比呂美の場合、声による情報提供者は西(男)であり、文字による記録は、西(男)が学術書の形で、伊藤(女)が詩の形で行っていた。西と伊藤は、先人を反復しているようでいて、その声と文字の関係はより複雑に入り組んでいる。男女が、声も文字も両方所有しているのである。

この男女の等価性は、例えば、西成彦+伊藤比呂美「家庭の医学」(一九九五・三、筑摩書房)においても別の形で実現されていたことであった。「コラボレイション」は、やりなれております。「パパはごきげんななめ」はもちろんそうだったし、「よいおっぱい悪いおっぱい」も「家族アート」も「ラフカディオ・ハーンの耳」も、なんらかのかたちでのコラボレイション、(中略)最後の方になると、伊藤は、という書き出しで書かれた文章がまさに西の手になるものだったり、またその反対があったり、どうも長年コンビを組んでると、たとえ頭の悪い伊藤でも西の考えるようなことを考えはじめ、文章のへたな西でも伊藤の筆致で書きはじめる、そんな乗り入れ現象がおこるようです(「あとがき」)。

「パパはごきげんななめ」(一九八九・三、作品社)は確かに伊藤と西の共著であるが、「よいおっぱい悪いおっぱい」「家族アート」は伊藤の著作、「ラフカディオ・ハーンの耳」は、西の著作というところになっている。しかし、お互いにお互いの著作のアイデアを話し

に出して聞かせる言語は彼をきちがいにさせ、彼はそれについてずつと考えているというのだ」と密接な関係を持っている。ハーンは、セツの語りによって取り憑かれたように「怪談」に没頭し、二人は共同作業でそれを完成させていくのだ。ただ、一方的にハーンが優位とは言えない言語関係を、西は「古事記」に類比的なものとして解釈する。西の説明は以下のようなものだ。

「古事記」は稗田阿礼が「帝紀」「旧辭」を暗記・誦唱し、太安万侶が記録したものである。「この劇的な共同作業は、明治時代の家庭という新しい環境の中に移しかえられて、セツとハーンのあいだにそっくり再現された」。柳田国男は、稗田阿礼女性説を唱え、「口承文芸」対「文字文芸」を「女性」対「男性」の関係として捉えている。「だいたい柳田からすれば、平安朝の女流文学など『女性』の風上にも置けない、知的選良の中でもきわめて抜きん出た女性文字所有者の作物にすぎず、柳田がこれとは別の核に据えたのは、小野小町や和泉式部といった歌人の伝記を捏造しながら、日本全国へと絵解きや口こみで流布させていった、女性遊行芸能の無節操きわまりない想像力と粘り強い伝承活動の方であった」というのである。ハーンと柳田は、「近代の女性の中に『稗田阿礼』の聲を呼び戻そうとするその情熱の激しさ」において共通する。

これを「ナシテ、モーネン」に適用すると、この詩がセツとハーン、伊藤と西の関係のことを題材にしたものでは終わらないという新たな局面が見えてくるのではないだろうか。そもそも、「女性遊行芸能の無節操きわまりない想像力」とは、朗読する詩人、伊藤比呂美のイメージにあまりにも近しいものではないだろうか。「家族アート」で、ハーンの「小栗判官」を伊藤が語り直していたこと

を想起してみてもよい。

稗田阿礼と太安万侶の場合から辿り直してみよう。声による情報提供者は、稗田阿礼(女)であり、文字による記録を行うのは、太安万侶(男)であった。セツとハーンの場合、声による情報提供者はセツ(女)、文字による記録を行うのはハーン(男)であった。西成彦と伊藤比呂美の場合、声による情報提供者は西(男)であり、文字による記録は、西(男)が学術書の形で、伊藤(女)が詩の形で行っていた。西と伊藤は、先人を反復しているようでいて、その声と文字の関係はより複雑に入り組んでいる。男女が、声も文字も両方所有しているのである。

この二人は、形を変えながら現代に生き続けるセツとハーンだったのだ。伊藤と西は、お互いに影響を与え合いながら、お互いに声と文字を所有し、二重螺旋のようにお互いの仕事を展開していく関係だった。西は、声から文字へ、伊藤は、文字から声へ、というように、お互いの仕事を展開していくという「朗読」を、説経師という「語りもの」へと接続し、現代詩の新局面を切り開こうとしていたのである。

結論、および今後の課題

「わたしはあんじゅひめ子である」ガバー見返しには、先述のように「詩集 朗読用テキストとしても」あるが、「あとがき」では、「はじめは『朗読用テキスト集』としてこの本をつくらうと考えていました。朗読は、もはや影響どころではなく、わたしそのものになりつつあります。わたし自身が声になりつつあります」と述べられており、のちに「とげ抜き」で完全開花を遂げる説経師系「語りもの」

としての現代詩へと歩みだした伊藤の確信が刻印されている。「ナシテ、モーネン」は、熊本において、西のハーン研究と二重螺旋のように絡み合うことで成立していた伊藤比呂美による現代詩の冒險、説経節とつながった「朗読」の始まりの象徴的な起源とも言えるテクストであった。

だが、ここで次の問題が生じるのではないだろうか。「朗読用テキスト」としても構想された「わたしはあんじゅひめ子である」、およびそこに収録された「ナシテ、モーネン」であるが、これを単に現代に蘇った説経節、あるいは書記官語に対する音声官語の勝利、あるいは安直な音声中心主義として解釈してよいものだろうか。そもそも伊藤の「朗読用テキスト」とは、そしてその朗読とはそのまま説経節と等価なものなのだろうか。

伊藤はさまざまな説経節に関する文献を読んだであろうが、「家庭の医学」の序文に「平凡社東洋文庫の『説経節』に対する言及があるので、同書を読んだことは確実であろう。その中に次のような一節がある。

説経節の正本の文章を見ると、その約半数が決り文句でできていると、いつて過言ではない。「信徳取つて肩に掛け」といったような、決り文句を土台として作り出された創造的な句もあえて決り文句と呼ぶなら、その大半が決り文句でできているとさえいえる。(中略)この決り文句のおかげで、くり返し説経節の正本を読んでいると即興的に自分にも語れるのではないかという気持を起させもする。確かに同一語句や類似語句や決り文句の頻用は説経節正本の文体の特徴であって、(中略)文体の特徴の中には、さらに重大なことがかくされてもいる。つま

代を替へて「とち抜き」へと至る通称分析等が、課題として挙げられるべき。

注

- (1) 「わたしたちあんなにもおもしろい」の「あひがき」にちかぶ伊藤本人は「衆族マート」も「わたしたちのいびき」も重要な詩集であるとしたことは想いつづるの必ず」と主張する。
- (2) *Masters of Modern Japanese Poetry* [日本現代詩の六人] The Morris-Lee Publishing Group, Rosemont, 1999.
- (3) [URL:http://japan.poetryinternationalweb.org/piv_cms/cms/cms_module/index.php?obj_id=7833](http://japan.poetryinternationalweb.org/piv_cms/cms/cms_module/index.php?obj_id=7833)
- (4) Jeffrey Angles, "Reclaiming the Unwritten: The Work of Memory in Ito Hiroimi's *Watashi wa Anjinhako de aru* (I am Anjinhako)", *U.S.-Japan Women's Journal* 32), 2007.
- (5) Jeffrey Angles, "Introduction: Ito Hiroimi, Writing Woman", *U.S.-Japan Women's Journal* 32), 2007.
- (6) Jeffrey Angles, op.cit.
- (7) 「第十五回萩原朔太郎賞発表」『選集』(新潮)二〇〇七・一一)
- (8) 「近現代詩の可能性 モダニズムの視点・女性の視線」——第八回 フェリス女学院大学日本文学国際会議——(二〇一〇・三・三) フェリス女学院大学コミュニケーションセンター)に収録。
- (9) 伊藤比呂美『読み解き「般若心経」』(二〇一〇・一・朝日新聞出版)

り、説経節は棒暗記されたテキストの単なる再演ではなく、正本として文字に書きとめられる以前には、首声を伴った生きた言語現象であり、文字を用いないで口から耳へと伝承され、演奏の際には、聴衆を前にしてその都度その都度その場で新しく、しかも急速に物語が構成されるものであったということである。それは歌謡を暗記してそれを節に合わせて歌うといった、いわゆる小学唱歌のようなものではなかったのである。

つまり説経節は、ある「決り文句」のある規則に従って組み合わせることで即興的に生成される。それに対して、伊藤の朗読は、あくまでも読み上げるための固定的な「テキスト」を必要とし、その都度その都度の読み上げ方の変化や、朗読外の時間における推測的な変更の可能性はあるにしても、朗読の過程において「聴衆を前にしてその都度その都度その場で新しく、しかも急速に物語が構成される」といった事態は決して生じない。だとしたら、伊藤の時、およびその朗読の説経節性とは何なのか。もちろん伊藤は単純に古典に遡ろうとしていたわけではない。あくまでもこれは、現代詩において最も注目されている最先端の冒險の一つという枠組みの中で捉え直されなければならない。根源的かつ広範囲におよぶ意義を持った問題なのである。

この問題を考察するためには、さらに伊藤が参照していた説経節関連の文献の特定、より専門的な説経節に関する知見の参照、および説経節の他の口承文芸との関連への考察の拡大・接続、あるいは伊藤が関心を示す非近代文学的な表現との親近性の検討、例えば漫画と伊藤の関わりが、説経節への関心とリンクしている可能性を探ること、そして「わたしはあんじゅひめ子である」以降の小説の時

- (10) Kyôko Omori, "'Finding Our Own English": Migrancy, Identity, and Language(s) in Ito Hiroimi's Recent Prose", *U.S.-Japan Women's Journal* 32), 2007.
- (11) 「ensō — 異文化の境をこえて — 田中 2000・10・25 得丸」[URL:http://www.asahinet.or.jp/~vb7y-td/rak2/](http://www.asahinet.or.jp/~vb7y-td/rak2/) 1210251.htm) (二〇一一年七月二十六日現在)「これから」紹介するのは、今から五年前にロンドンを訪れた時人の伊藤比呂美さんに私が直接お話を聞いたことについて話します。英国ヒトースマン・ユニヴァーシティ・ロンドンの日本食レストランに行くまで無料でその最新の新聞上で掲載してもらいました「あなたのウェブ、ネット上のものはその転載であると考へられるが、もとの新聞が入手困難なので、ネット版を用いる。」
- (12) 有名無名問わずさまざまな他者のテキストからの借用を自作に織り込んでいく。
- (13) 松江市立図書館だより「あひがき」No. 39 (二〇〇五・三)
- (14) [URL:http://www.web-sain.jp/natsue/pllover/library/yakumohml](http://www.web-sain.jp/natsue/pllover/library/yakumohml)
- (15) [URL:http://dhatenare.jp/kunamotohand/](http://dhatenare.jp/kunamotohand/) 本稿もまた、一地方都市において創作家、研究者、一般市民があるやかに連帯しながら、文学を通じて地域の文化を活性化しようとする同隊の活動の一環として捉えていただければ幸いです。
- (16) Kyôko Omori, op.cit.
- (17) 後に西成彦『耳の悦楽—ラフカディオ・ハーンと女たち』(二〇〇四・八・紀伊國屋書店)に収録。

(18) 「わたしはあんじゅひめ子である」に収録された「ニホン語」中の「トランス、ホビュレイション／*クマモトに住むトーキョーに行く」には、「コドモはトーキョーでうみました(中略)／しかしコドモは平坦な／高低のない／ニホン語をしゃべりはじめました」とある。

(19) 山本吉左右「説経節の語りと構造」(荒木繁／山本吉左右編注「説経節 山椒大夫・小栗判官他」一九七三・一一、平凡社)

(20) 例えば、井上雄彦／伊藤比呂美「漫画がはじまる」(二〇〇八・六、スイッチ・パブリッシング)等。

【付記】

本稿提出後の校正前に刊行された『続・伊藤比呂美時集』(二〇一・一・七、思潮社)に収録された「ナシテ、モーネン」においては、「アクセント」が「抑揚」に変更されているが、論旨に影響をおよぼすものではないと判断した。

(あとがみ しろ)